

重修真書太閤記

十編
六

天保
十
年

13
459
96



13 録
459
96

消
福
永

重修真書太閤記十編卷之十六

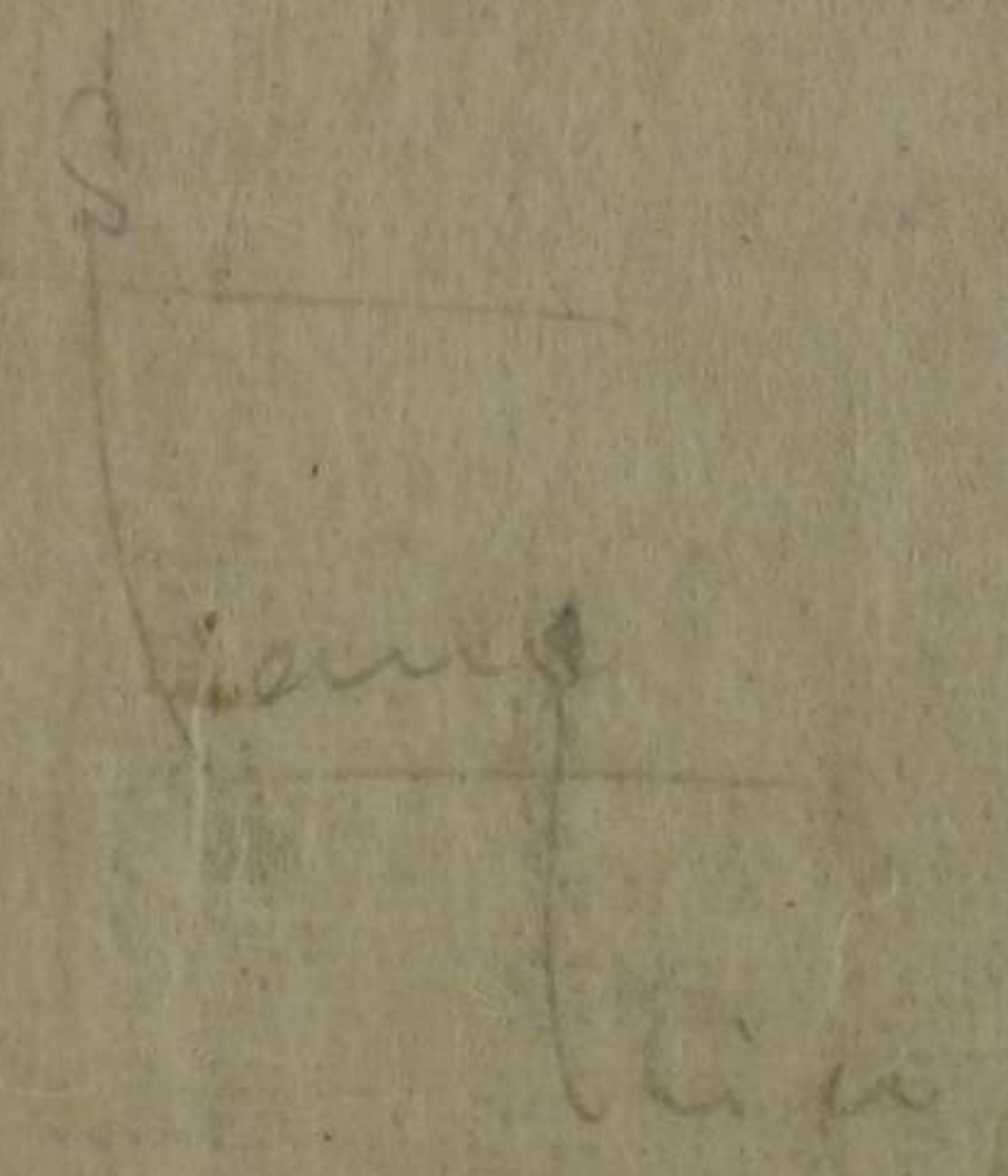
浮田黒田讃州發向の事

并後藤又兵衛悪風と海と渡る事

天正十三年四月廿三日浮田八郎秀家のまへ十三
歳ふと陣代として叔父浮田七郎兵衛備前美作
の兵士一万五千餘騎と率ひて出陣したり又秀吉
公の陣代黒田官兵衛孝高檢使に萩原七郎右衛門
尉家次小西彌九郎行長二万三千餘騎都合八千餘
騎室の津に陣を取れり海上十里より備前
國牛窓に兵船數千餘艘を泊きたるに家々の旗船

后
會
印
攻

Von Abmarschierung
von
Utsuda u. Kuroda
nach



大陽言一 紛々一六
印汝風^{いんじふかぜ}吹^ふひ^ひ嚴重^{じやうじやう}備讚岐國^{びせんぎこく}一押^{おし}こ^こへ
る^る頃風^{ころんかぜ}を^を待^{まち}たり^りけ^けし^し但^{たゞ}牛窓^{うすまど}より^{より}讚州^{さんしゅう}へ^へ渡^{わた}る^る
る^るへ^へ犬鳴直鳴^{いぬなみぢなみ}女木勇木^{めぎゆうぎ}の^の鳴間^{なみま}と^との^のり^りて^てる^るつ^つら^ら
五六里^{ごろうり}の^の海上^{かいじやう}なり^り然^{しか}る^る風^{かぜ}烈^{れつ}浪^{なみ}荒^あら^ら故^{ゆゑ}に^に
備前^{びぜん}の^の國^{こく}へ^へ浮田^{うきだ}の^の領國^{りやうこく}あり^り日^ひ頃^{ころ}月^{つき}頃^{ころ}の^のた^ため^めと^と
知^したる^る船^{ふね}人^{びと}も^もある^るへ^へと^と諸^{しよ}大^{だい}將^{しやう}の^のつ^つも^も浮^{うき}田^だ
の^の陣^{ちん}に^に會^あひ^ひ合^あは^はし^して^て評^{ひやう}定^{てい}有^あり^りる^るふ^ふ備^び前^{ぜん}國^{こく}の^の海^{かい}人^{びと}と^とも
一^{いつ}同^{どう}に^に此^こ風^{かぜ}に^に中^{ちゆう}々^{じやう}讚^{さん}州^{しゅう}へ^へ渡^{わた}る^るへ^へと^とも^も今^{いま}四^し五^ご日^{にち}の^の
うち^{うち}に^に頃^{ころ}風^{かぜ}に^になる^るへ^へと^とも^も只^{ただ}今^{いま}何^{なに}と^とも^も申^{まを}定^{てい}
め^めり^りと^と申^{まを}け^けし^し何^{なに}も^も海^{かい}上^{じやう}の^の事^{こと}に^に海^{かい}人^{びと}船^{ふね}即^{すなは}ち^ち
に^に任^{まを}せ^せと^とて^て其^{その}日^ひの^の評^{ひやう}定^{てい}に^にさ^さと^と止^{とど}ま^まし^しけ^けり^り孝^{かう}高^{かう}
と^と申^{まを}す^す

本陣^{ほんちん}に^に歸^{かへ}り^りけ^けし^し後^ご藤^{とう}又^{また}兵^{へい}衛^ゑ基^き次^じより^{より}け^けて^て今^{いま}
日^ひの^の御^ご評^{ひやう}定^{てい}に^に渡^{わた}海^{かい}の^の詮^{せん}義^ぎと^と何^{なに}も^も申^{まを}て^てい^い實^{じつ}に^に左^さ様^{さま}
に^にい^いへ^へ當^{あた}御^ご手^ての^の御^ご出^{しゅ}船^{せん}に^に何^{なに}時^{とき}に^にい^いり^りと^とも^も其^{その}
用^{よう}意^い仕^しり^りと^と申^{まを}け^けり^りと^と孝^{かう}高^{かう}聞^きて^て今^{いま}日^ひ備^び前^{ぜん}兒^こ
鳴^なあ^あり^りの^の海^{かい}人^{びと}船^{ふね}即^{すなは}ち^ちと^とも^も召^め集^じて^て評^{ひやう}定^{てい}し^して^てい^い
つ^つら^ら何^{なに}も^も此^こ風^{かぜ}に^に渡^{わた}海^{かい}に^になる^るへ^へと^とも^も今^{いま}四^し五^ご日^{にち}過^する^る
頃^{ころ}風^{かぜ}吹^ふ出^{しゅ}り^り其^{その}上^{じやう}に^に渡^{わた}海^{かい}然^{しか}る^るへ^へと^と申^{まを}け^けり^り
海^{かい}上^{じやう}の^の事^{こと}に^にて^て海^{かい}人^{びと}船^{ふね}即^{すなは}ち^ちの^の申^{まを}に^に從^{したが}へ^へと^と檢^{けん}使^しも^も
申^{まを}と^とい^いふ^ふり^りて^て今^{いま}二^に三^{さん}日^{にち}の^のい^いり^りと^と休^{やす}む^むと^とも^もさ^さへ^へ
さ^さり^り出^{しゅ}船^{せん}の^の用^{よう}意^いに^によ^より^りと^と早^{はや}り^りと^と申^{まを}され^れ
け^けり^りと^と聞^きて^て又^{また}兵^{へい}衛^ゑの^の腰^{こし}の^の技^{わざ}に^に大^{だい}將^{しやう}達^{たち}の^の評^{ひやう}定^{てい}

うか海人の船即の申日和の商船の運漕さて釣
とたし綱を引つる景氣よひなり軍よ向ふ風あり
日和といつてり知つてこれみ習へと内大臣殿ハ
よも仰られし浪高く風荒しとも箭を飛し玉を放
つるとの危きことハよもあらういくさよ向ふ習
ひハ箭と玉とも恐むぬののど然ハ何とて風あ
らく浪高しとて空敷兵糧食つらふと足ふとのむ
て晝寐とてさや其上伊豫國へ發向とる大將ハ
加藤清正とれよ從ふ吉川小早川よ阿波國つハ
蜂須賀仙石罷向ふと承るこれ等の人々よ打渡
りて軍と始ゆらん鬼といふれ神とたとへらん

とつる清正よ智惠深き小早川武勇勝とて吉川ハ
り先とてさよこの當方よとて口惜り多へし
伊豫あり土佐つハ道近く讃岐あり土州へ向ふハ
道遠し讃岐と早く切從へて土州へ向ふハ伊豫
の衆よ後ともとん然と讃州渡海遅りし何と
早く土州へ入るへとや何の手よ切勝ても内大
臣殿の御威光と申処ハ同一けとて二川取ら
當方一番衆と仕たさめのもてひやあり日和と海
上穩やういふハ敵も定めて用心とて其上總軍
一度よおし渡らハ備前勢案内者あり必定あり
さ芝居と踏らん然らハ御陣代の面目と失ひ可

申や檢使の中より小西彌九郎心の内のつら
さ油断いふべしなり基次考申ふ今夜四時過
い海上浪風おこやうよなりんと疑はる此時刻
延して其詮をい早々御用意ありと御出帆然
つゝい上りてちりり當方一手竊し御引移あらん
こい然るへりり依て今一應浮田りゆ檢使
へ御示談あるへりり浮田も檢使も同意ふこい
知ていその上りて御進發あり全くの抜懸る
いり早お渡り一軍と敵も味方も眠と
覺さる申へりり申ふり孝高も大膽不敵の申条
やとわめりり共基次り申處實に道理あり海

人船郎のりり云日和ハ平常のといり今軍
向ふ時いりりこの海人も船郎も軍も馴りの
あるへりり然るり如斯大風も船と出を例わ
らんり申されつる基次笑て申さく大風も船
と出して勝利と得つる例といり元曆のいり
九郎御曹司義經平家追討の院宣と蒙り尼崎大物
の浦りり進發ありり時也大風林の木と吹折逆浪
天と浸していりりいと義經船と出を天氣あり
風浪おこやうなりり平家も源氏定めて渡るか
らんと用心をいりり大風逆浪よりり源氏
のりり候へりりやと平家油断したらんその処へ寄

てあを勝軍あるへけしとて渡りあひしとらて
 しく八嶋檀の浦の軍よりちそ平家と追落しとけ
 ひつるこい誰も知たることよと申けるよと孝高
 も尤なりと得心ありて再度浮田の陣に至り今宵
 風をこし和あし出船しつとあめふい如何と申
 されつこい浮田七郎兵衛小西彌九郎一同より
 る大風と船と出をし例あしと其業を以て身と立
 るめの共つとも申てゆし御陣代ゆい左様いなる
 片意地と申され万々一過ありてい我々り役目も
 立とと申あうい孝高のりよも心得てゆとて陣所
 へうしういけしと又兵衛待付りゆくと問けるよ

孝高其方う申せし通りつとも同心不被致し然
 い我等をりう出船をくくし基次用意りよと尋
 あつるう保てあり支度しとゆい早御乗船然る
 つくいと申けるよと母里太兵衛菅六之助栗山備
 後以下我先ると船と打乗碇を引あけ友綱を解て
 先鋒十三艘とや打立とひしゆい船子とも以の
 外は仰天一のの大風と何とて船の出さるよと
 や物と狂をよあふりやと申げしと又兵衛基次大
 ふりうり悪し者ともものめつひ様や已等いひの
 軍のちちと習ひしとや兎角つよあふりよと漕
 やりあしと聞びい切殺し海へいめんと太刀と抜て

て切てうくる船子ともいひて此人逆らそ忽
 あつて討と命と棄て漕出て海とこら千
 二一つ助くる道も有ぬと決定し帆を三四合
 二引うけて馳出い風を帆に受たるかあすれ
 二下と切さ大綱小綱数十條と垂たとい浪高け
 二ともこととをび大將士卒打まうと汲てい
 二船に乗るう又艦のりてい船の足と静め千餘
 二艘とのりい真一文字漕こる基次うい
 二つとく其夜亥刻過るうう沖あ風も静ま
 二う浪つて平らううううの船子とも初
 二て又兵衛と真さの巫とを感しける夫ありい

又兵衛う下知は從めて漕けるわとよその曉八半
 過るわどは八嶋の浦よこ寄たり又兵衛船より
 真先は飛上り四國のうら瀧岐の國へ一番のうい
 後藤又兵衛基次生年十九歳とを名乗たり彼是と
 ころうち孝高も著岸あれい基次南の岸一本
 陣と居たり但爰に敵一人もな然に敵のある
 処へ押行へとて牟禮高松とこて打ける処よ
 喜多の城とて高松左馬助の居城あり是は香西伊
 賀守り旗下なり唐人驛正片山志磨守と加番と
 て籠置けるよ上方勢追々渡海の注進ありい
 つとも唐人片山少も動をば大石大木と釣付今

や上方勢寄来ると矢束とて狭間切落して待居と
 う廿八日の早天は黒田の先鋒菅六之助正利母里
 太兵衛搦手より栗山備後中嶋總兵衛と大將と
 て六千餘騎後藤又兵衛基次へ游軍とて敵の強
 き処へうけ向ひ息とも繼をば責寄たり城内より
 も鉄炮と雨の如くは打ちぬく大木大石を投出し
 投出されと防さざる上堀深く堀高げると容易
 と落へも見えび又高松左馬助無雙の勇士より
 て唐人片山世と聴かれ智勇の侍はれ守るも
 堅うりしと後藤基次大筒とて角矢倉一つ打崩
 しけるより其崩れより菅六之助正利第一番み

乗込しとみて母里太兵衛の大手の門を打破り栗
 山の搦手と責破り城中へ込入る香西志磨守大身
 鎗とて突出母里太兵衛と戦ひしり母里と討と
 高松左馬助生年廿五歳栗山備後と戦ひしり今
 是すくちなりとて太刀の鋒を口よしく貫きて死
 したる孝高も無雙の勇士なりとて一堆の塚に築
 りあめてあれと懇に吊となりし後唐人も
 片山も思ひし軍して終り違つて討死あり

細川源左衛門尉偽計の事
 并小西彌九郎不覺の事

後藤又兵衛基次年若すれとも軍の道よりこく
大風逆浪と凌りて讃岐へ押し入り喜多の城と落
し高松左馬助とくめ能の多く打取りのち天
氣定り風和浪平りとなりけるより浮田小西杵
原纜と解兵船三千餘艘五里の海上に漕つゝ廿
九日の午刻より八嶋の浦に著船し浦人は容子と問
ひ藤巴の紋りきたる旗さして軍兵六七千餘騎も
ありつゝん渡り来て喜多の城を攻たりつゝるを
てゝ落城とすとおやえの関の聲此國人の音聲と
いふべと申けるより浮田小西杵原の音聲も
されもその大風は渡海して去るも後陣と待合

もをばすの一城と攻落しつゝこの大膽さよ但黒
田へつゝも尤様なる危ふき軍とをぬりのなるり
不思議なりける軍立ちかといふも不審しなり
ら黒田陣処へ着て先勝軍の賀ひて其後後
藤又兵衛基次り計策なるを聞浮田小西杵原
聲と齋と舌と振ふて驚歎たりける是より上方
勢打揃ふこれいその喜多城に逗留し及らば猶奥
深く進むとてこの城に火と掛たりける折
ふ東風吹競ひけるより香東香西阿野鶴足那
珂の郡すくも餘烟あびたつゝ海越に見えり

八月二十一日

しうら高松丸亀の城々よても肝を寒しく恐怖せ
り黒田孝高山田郡の郷民と招き金銀を與へ酒と
吞せ我々の都なる天子の勅定より内大臣秀
吉公の御代官として發向する処なりたし勅定
の趣へ別義あはるべ四國の管領細川屋形の時
朝廷の公役と勤仕をすることとて憲法違はる
し去天文廿一年細川持隆三好う為弒をら
のち總て朝家の公事と勤むることなく正税の運上
途絶たり是等の事と只今新に仰出さるる非
先規と糾して舊章を治しめん為なりとあり
うの郷民ともゆるも難有仰と承らうゆめぬのうを

細川屋形の滅亡ありしのちへ香川信景香西伊賀
守つとも三千余の不限り西長尾の國吉甚左
衛門へ與力千餘人又此郡より長曾我部右兵衛尉
と主とす細川源左衛門尉と副將として總て一
千五百余人と籠置たり元親の阿波の三好郡大西
町白地の城に住して當國への後援を心得られ
と承らうゆと申けるより孝高褒美とあり案
内者となりたりけりそのち諸將集會し軍の談
義及ひしとあり叔父と細川源左衛門尉の長曾
我部右兵衛尉の後見として高松の城ありけり
喜多落城して高松左馬助とあり唐人彈正片山

志磨守以下大勢討死つとハ香西伊賀守大は恐
怖上方勢志と通とるなんといふ人もあり然
ハ我この高松よりありて香西より裏切とるとんも計
知つてつとよも當城に住んと謀ふと似た
りとして植田の城へ引入長曾我部右兵衛尉と一手
よりありて備と固めそのうち池田由良山の城と攻
ささんと熊と人数と僅と籠實と攻めけと見とて
うけりて上方勢打寄く評定しける処へ國人注進し
ける上方の大勢渡海とより長曾我部の老
臣細川源左衛門尉といふの牟禮高松と引拂ひ
山手のうとある植田の城へ引移りてハその道筋

池田由良山と申処は少々人数と残り置は是ハ上
方の容子と聞えん為なるは是城と攻抜ゆと
植田の城へ上方の通路絶申へさよといと申ける
よありさつと一責をめて見んとて黒田の勢五千
余人よりて發向ハ城中よりてハう保ての約束なり上
方勢ありてをて箭と射りけ鉄炮と放つやハか一
度二度ハ関とも合をけるりそのうちハ間道より
竊と落失しりハ寄手忽と城を乗破りて勝関をあ
ける但ち由良山より火とつけ植田とさして押寄
るの向ひなる山上に城と構えたり追手ハ坂道

嶮くして搦手へ山林奥ふり後藤又兵衛四方と
さつと見て黒田の馬前よりけふさがり此地の有
様心得ぬこのゆなりその當國より打入と直喜多
の城と打落しそのうち牟禮高松と開き由良池田
の兩城を明退と敵の偽計と相違あるよし此地の
形勢とこり見ゆ進よ宜敷く城よりい
り難く引よの實は足並あ〜〜〜味方の難義申
こりりふ其上味方へはふこの城はく〜〜跡と
切しふいいう〜〜試よ此邊と放火して手
り引上ゆ方然る〜〜左あ〜〜敵の有様明白
ふ志られ申せ〜〜と申けるよ〜〜後藤ハ若年ふり

ら思慮深きゆめなり彼ら申条至極尤よきこと
ぬり早々人数を引上ゆへと下知して黒田の一手
を引上たうあ〜〜小西彌九郎行長と〜〜出敵の
計略何不どのとあらん我々〜〜加藤虎之助清正
をよひ西川伊豫國へうち入勝利を得たりと取々
噂を伝ぬり志るゆみ我等あ〜〜攻法めぬあら
云甲斐かく引返さんと何まりよ残念あり當城を
乗とらんと我手の中みありま〜〜めやゆのともと
申けよの浮田の家臣長船主殿このたび黒田より先
かけせられ我軍勢お〜〜れ〜〜と人よ笑れ〜〜とい
ふも口惜とわゆ折ふ〜〜かよの小西殿の云る

処我等らあゝ海もよよく叶つり不肖かれとも浮
 田ら軍法哉心よおめし某形り植田の城を乗取ん
 と我方寸みあり右兵衛尉と源左衛門尉との首を
 とらんとの最安くひのれをと高聲よのくつよ
 かハ黒田今更せんやう形く此義よしとらひ城子
 むかふ後藤かさ孫て申様ゆらはこれより跡の坂
 口へ伏を置不意よそかへ申へしとて黒田の勢を
 引分て後陣の志よりとあしつて黒田小西ハ却
 てよろこひ浮田の先陣ハ長船主殿森崎新右衛門
 二陣みハ小西彌九郎行長都合その勢一万四千余
 騎せしつとあし出以黒田ハ伏と形り浮田七郎兵

衛ハ援兵を心得てそ形へたり城中みてあこの体
 を見て小西浮田ら進みそを引寄てそか殺み
 をへしと勇けり去不とも寄手柵際まで攻寄て
 鉄炮うちかけ逆茂木を引のけ木戸作十郎と名乗
 て一番み込入たりやれより我もくと備前勢真
 先かけくまきけけるみより三重の柵を引やぶり
 城門の前まで責寄たり

重修真書太閤記十編卷之十六終

[Faint, mostly illegible handwritten text in a rectangular frame]

重修真書太閤記十編卷之十七

信親讚州後援勇戦の事

并後藤又兵衛智勇の事

浮田小西の兩勢讚州山田郡植田城へおつめ柵
と破り逆茂木と取除只一時は攻入んとひしめと
ひると見て細川源左衛門尉時ハ今あるをよと関
とこつと揚るや否弓鉄炮と兩霰の如く打出さそ
城際まをり付しものどハ大石大木と投うけし
うらひしさけるもぞ手負死人その負多く兩家の
備えられて右往左往と逆萌るくと立直さんと小

西彌九郎長船主殿大音聲の死やりの共進め侍
とも爰と逃て再度人面と合さるゝと恥しめ
るちしめ采配を取て下知られとも崩さるゝ
勢共ぢぢの備は見えける処は城中まじく
震動し一道の狼煙ひくゝと其儘八方より
鯨波を作り植田の寄手の跡を立切攻りける長船
も小西も思ひまゝに仰天し當城の後詰の勢り
く追あゝんと兼て知さるゝと爰迄の寄ま
しゝのものを口惜や如何せんためらふ処をた
うし見定め細川源光衛門尉八百余騎を三手に分
城門を開て切て出さへ長船主殿り手の者立是も

ちく切崩され大手の坂を逃るともあゝ混崩と
崩と立てどまゝに落さる小西彌九郎只一人殆止
りて討死をなむとたのひ定め味方を勵まし進む
処へ搦手の方より國吉甚左衛門尉千余人と真丸
まじりて押りける其勢あり輪宝の山と砕く如
く上より落を勢なれはあれと防術は盡實は危
ろく見えける處へ木戸作十郎走懸り國吉より千余
人と事ともをば切拂ひ突拂ひ手痛く戦ふると
小西彌九郎も逃て命を全くは長船主殿の長
曾我部細川り首を取て最安しこのひける詞も恥
く味方如斯敗軍しる上は何面目も生存へ

三細川と組て勝負と決ををやと思ひ極めく進
ける処よりしたる細川は旗本へ行くる主殿
へ鞍の上より立上り鐘踏をり大音あけをれ見え
ちるは細川源左衛門尉と見たり寄て組あへ中國
武士の魂見をんと云なり一鞭うちを馳寄る處
と窺ひをまりて打鉄炮は真正中を打ぬるをその
馬より落ちて死したるけり其外の者ともは多
勢は引包まり討定め一つ手も負つたまゝ逃
ぬのの深手まで勿々の用は立りて黒田計
ハ備定めて動くぬの四國方の勢とも容易に
とめてあつるをいふをくためひけるるは細川

源左衛門尉浮田小西の勢を追をて引取あつる
黒田とよとよ見と志のり勢を引上ると黒田方
の先鋒のみの母里栗山管など一同にあめいてり
ゆれは細川もこつと大事と戦ふころ細川方は並
をこし亂るるを見りやの後藤又兵衛は伏あさ
たる勢ともあつるつと起り立山々林々火を
掛て焼立りうの四國方大は狼狽し散々敗走を
ると母里栗山管追つめ責立る初と四國方念
なく打負細川も既危あつるを長曾我部右
兵衛尉手勢引具し援來りつるは後藤も人教を引
上勝関を作りたりける處へ萩原七郎古衛門浮

田七郎兵衛一万余人よと馳來る小西ウ勢ふて
ひ勇ま三此勢よて植田の城へお寄無二無三
攻落さんととやういふことも後藤又兵衛危あは戦
ひをぬあそよけよ四國征伐今日よりさうよとな
らびと味方を制して陣を取細川源左衛門尉の手
の中へ入しものを取損したる心地とて皆あを土
洲へ注進し加勢をいふたなるはれうする處へ大和
大納言近江中納言の軍勢追々渡海しけるよあり
土洲の加勢延引しつゝ伊豫國へ援兵を申せし
よ長曾我部彌三郎信親讃岐國と破らしてのうか
るよと一万余騎よと駈向ひ國競よ到りて容子と

聞き喜多の城を始とて牟禮高松由良山等の城々
とて落去し今へ植田の城をうり持固めつととも
夫も援兵延引をい落城遠ううと云を聞の實よ
細川ウ二心なき由たうよ頼めうりけるよよ
つ然の片時も猶豫をへううと急さけるよとよ
既よるや植田よ去と一里斗よあし攻よの會圖の
狼煙を上たり植田の城中よの然の信親をを付
あひしなりと勇ま立又寄手の援兵の來りよと其
備よるよの叶うと城うり二三町引退を拵よふ
う逆茂木を引て是を待小西彌九郎へ敗軍をよと
深く憤り又長船主殿の戦死たり専をる處黒田

陣のこ手固くして少も萌とて必竟渡海より
尔降孝高一人との功高と何とも残念なりとお
めひ木戸作十郎と呼寄長船紀伊守の許へ使立
今宵信親の陣へ夜討せん」と語りひけるは紀伊
守一議も及む比同心を是へ信親若年なる上長
途と馳たせし定めて勞つらん備ものまて固く
とあめひつとひなり然るは長曾我部の家法
て長途と馳るもの人数と五川より引糸て押ける
より何れも一手の歩行し四手の先へ廻りてを
とそれの役と勤むされの非番の備のつゆ油
断らしく見えつると長船紀伊守の恐ひ者能々見

さるめ信親若年の大将はさへ心志まらば大軍
て援ひ來るを以て敵を侮りありのまらば陣中
以の外油断の体より申と信し總勢一度は責入
けるは敵一人もなり長船小西よりめて心付南無
三寶敵の謀は落入たりゆ引退て備と立よと
騷と立と見とまらば熊谷四郎左衛門尉なりと名乗
りけ檀の木の手の一丈をうりよと筋鉄入たる
打ふり夜中み陣中へあこ入りの盗人なりぬ憎
一人も生て返とまらばと八方は難廻しは小西
も案内へ知は幕張の内と幾度となく打廻り漸
漸元の処へ打出て我陣處へ飯らんとこれ敵向

大陣言十綴卷十七

ふへ廻りて鏃をそろへたりあひ叶らんと引返を
 頻に鉄炮と打掛たり小西長船方角と失ひ我先と
 と廣くと志しうけ走と信親旗本の兵六七千を
 うりよと遠々と取巻たり今はい是まてぞ敵と引組
 さい違へると聲くま呼らうの近つけの五尺の
 餘る小溝と隔て楯と突るへ竹束と配りて敵一
 人も出合を然いあの山より上り高きより望と見ん
 と心付這々走上とあいの如何の野も山も堅
 食の紋なりぬ所もなし然い何處の陣へ返り
 入つこと當惑せし處へ熊谷四郎左衛門尉無二無
 三と切てうととい小西長船の勢谷底へまへり落

され死をるのの教とし長船小西と討
 見えし處へ黒田の勢馳來りて面もふり信
 親の旗本へ切りける熊谷あれと見て黒田はあ
 侍なり長船小西のたぐひは非と彌三郎殿一人と
 てい心元なりとて長船小西と打とて黒田の横合
 りり突りける此隙に兩人不思議の命と助りけ
 り細川源左衛門尉の彌三郎信親と黒田と戦ふと
 見て城門を開き突て出と小西長船の度と
 失ひ隊伍と散亂に彌三郎信親旗本と崩
 して切てうり浮田七郎兵衛の陣と真先と突破
 とい上方勢總敗軍となりさびりの黒田も後と見

大岡忠生編

せり引退く彌三郎信親馬の上より立上り黒田の手
 まで後藤又兵衛とゆふん何國あるを四國生
 育の長曾我部彌三郎田舎のめり太刀のさうねと
 ろく見ゆやと呼り切りけるよ又兵衛の
 彌三郎信親の軍たて尋常あり何さま四國の大
 將軍や容易く戦ふ処に非を人数を引上隊伍を定
 めて陣と取り黒田も同じく引退く然のち黒田
 小西より向ひ申ける我等の内府の陣代なり貴邊
 の檢使なり檢使の手と下りて軍をい何とゆふ
 心その其上より敗軍として士卒と損をい何と大
 坂へ注進申へるや貴邊の心中承りたくいとい

断れて彌九郎赤面一敵の術とい存をば餘り油
 断氣に見えいと以て心にく馳りゆくといと近頃面
 目なく注進の義黒田殿の御心次第より頼に奉る
 と申けるあより孝高も心とい事穩便よりなりといけ
 り四國方より彌三郎信親士卒の勲功と糾し白
 地に在陣する元親の許へ注進し當座の賞として
 信親の手元より或は太刀或は脇差又は馬鎧物具
 そのゆとりを應じて是を與えしり諸軍勢の彌
 三郎と戴き尊ぶると元親も増たりけり爰より黒田孝
 高浮田七郎兵衛の四國方勝り乗て寄來るべしと
 用心して待つこともその沙汰るし是の如何よと

評定し及へば後藤又兵衛申様喜多高松由良山か
 と手軽く棄たさる此植田より手痛く防くこと
 為と知れりことこれ四國方より便利しく攻め
 あし地方とありえいそれと知つて是を攻め
 て士卒と勞らし事彌三郎信親の術中陥りと
 申へく依て愚案より此処より向城を構へ出の城
 と押え置早々阿州へ御向ひ秀長卿と談判ありて
 白地と御責然りてと存ひ阿州より出張を元
 親土州へ引返りて讚州の自然と離散をへく
 存ひと申と孝高充なりと同心し植田の城を以浮
 田七郎兵衛より任を置黒田の阿州へ趣さける

大和太納言秀長淡州着陣の事
 并曾呂利新左衛門の事

大和太納言秀長卿と申へ内大臣秀吉公同腹の弟
 として初め木下小市郎といふ今年ハ四十歳なり
 一四國退治の總大将として四月廿四日出船あり
 副將軍ハ三好孫七郎秀次今ハ近江中納言と云い
 まし十八幼弱なり蜂須賀彦右衛門尉藤堂與右
 衛門尉堀久太郎田中久兵衛尉一柳市助是と補佐
 とす目付より増田仁右衛門尉仙石權兵
 衛尉ハ淡州の人なり案内者より召加えたり
 其日淡路の須本著あひ廿五日福良より阿州

へ渡海あり總軍六万余とあり内大臣秀吉公の泉
州坂に御座ありて諸將の注進を待とむ

今の海路大坂より淡路須本へ二十三里とあり
福良の須本の西より阿州坂東郡と相對ひ其
間と鳴門と云流布本より秀吉公福良へ御勤座と
いふの誤也

四國征伐延引し及も紀州より南海とあり廻
直し土州へ切入をらるへとため兵船千余艘と坂
の海に浮へむひけるは加藤虎之助の飛脚第一番
に馳來り伊豫國に渡り三津高尾道後の三城と攻
落し松山の城と取て味方の根城と仕ひ由と注進

しげる是は海路八十五里と隔たる処なり其次は
黒田官兵衛尉孝高の飛脚參着し讃州へ渡りやい
るや喜田高松の城と落し植田の城に向て合戦最
中のものと言上と讃州より四十九里の海上な
り阿州より三十五里なれともいふ何とも申
上ることなり然るに内大臣秀吉公は毎日、坂南の
庄今市町の千與四郎入道利休宗易よりいつあや
の宗久津の宗及紅屋能登屋よりいふのものと召と
て御茶ゆへ上られ一入御機嫌よくありませし
又その頃坂南の庄目口町の内なる浄土宗の寺
とありて住居とる鞘師より曾呂利新左衛門といふ

めのあり生質口才ありて狂歌うろ口の達人なれ
へ人の氣と取と妙を得たり或とさ紅屋某のあ
のゝことと申上げると夫くとして召せり紅屋と
くら召具して御前へ出るよその体まつ鬢うとく
しと月代赤く元たり面さ一眠つと何とひくあ
しひなれ御側の人々見ると其儘笑とあくひ秀
吉公御聲高く其方名へ何と申と仰らるれい畏
て曾呂利新左衛門めをとて召とのれい曾呂利
と罷出てひひー又のや御意の名へ何と申とわ
らうへい曾呂利曾呂利新左衛門新左衛門よとい
と申上る秀吉公打笑らるをいひ何さま曾呂利う家

業へ何と仰らるるといへさんい日本第一武士の魂魄
と鎮め置まるとる鞘師よと御座いと申上る秀吉公
はるると鞘師と聞食とて何故と曾呂利と申や
と御尋あを新左衛門謹て私作りい鞘へ太平鞘
と申まはるその譯いうると御不審もいそん曾呂利
や扱たる御刀鞘口へのととまはるとそらうと納り
まはるまらう曾呂利新左衛門と親しきものゝ目
付ていと申上るとい秀吉公成初と親しきものゝ目
う付たる名なるへその親しき中よと何者の目
め先へ付しうとれ聞ふと仰らるれい新左衛門
しこまらう左様とさうまは私との外兄弟多よと

兄も数しとゞ弟もうどしれどゆゑとゞ御座とい
 この兄の目う付まゝたりとの弟の目う付まゝた
 り儲御尋に困りしれに付て思ひ付まゝた
 か御座うまゝ殿下様とい天下太平の大將軍様と
 申まゝの恐じなうも私と同しとゞて誰り先
 へ目を付まゝたり一向より申さぬと申上
 へ何我等と天下太平の大將軍と申とゞ太平の大
 將軍と太平の執師と似合たりその太平の嘯と
 申とと仰らるれに新左衛門とて殿下様と
 へ徳利とて駒の出まゝと御覽被遊まゝたりと
 申上とて秀吉公とれの間違ひなり瓢箪とて駒

てるといふていなう新左衛門尤様とてさうま
 り瓢箪とていづつても出まゝり徳利とて出まゝ
 たと私見不申夫故伺ひまゝと申上れに秀吉
 公何瓢箪とて駒の出たと其方へ見とて新左衛
 門のつても出まゝと申上る秀吉公然に出して見
 せいと仰らる新左衛門懐より瓢箪と取出し只今
 駒と出まゝり出まゝり御褒美とて申
 秀吉のうも出たは望次第褒美とゆらうと仰
 らる其時新左衛門瓢箪と取て一ありあると何り
 へ知は飛出たり新左衛門とれと取て御前とて
 置へ將基の駒なり新左衛門是に實に上々の駒と

て御座の名へ金將と申し御褒美の金と賜らる
 つゝいと申上る秀吉公御機嫌よくこの世の不思
 議の奴らふ日本國中秀吉よ向ひ左様のこととる
 者有へとも褒美取と望めくと仰らるれの新左
 衛門難有然い今日一文明日二文と毎日一倍
 鳥目賜らりたりと申上る秀吉公聞食さる町
 人なりそれとこの事安さとなり役人とも新左衛
 門鳥目遣をいと仰らるれ役人仰天し夫の大
 造の事みいと申上り秀吉公大造の事とハ事お
 書付見せると仰らるる湯淺甚助一の
 書し御覽入まつ朔日一文なり二日ハ二文

三日ハ四文四日ハ八文五日ハ十六文六日ハ三十
 二文七日ハ六十四文八日ハ百二十八文九日ハ二
 百五十六文十日ハ五百一十二文十一日ハ一貫二十
 四文あり十二日ハ二貫四十八文十三日ハ四貫九
 十六文十四日ハ八貫百九十二文十五日ハ十六貫
 三百八十四文十六日ハ三十二貫七百六十八文十
 七日ハ六十五貫五百三十六文十八日ハ百三十一貫
 七十二文十九日ハ二百六十二貫百四十四文廿日
 ハ五百二十四貫二百八十八文あり廿一日ハ一千
 四十八貫五百七十六文廿二日ハ二千九十七貫百
 五十二文廿三日ハ四千九百九十四貫三百四文廿四

日ハ八千三百八十八貫六百八文廿五日ハ一万六
 千七百七十七貫二百十六文廿六日ハ三万三千五
 百五十四貫四百三十二文廿七日ハ六万七千八百
 貫八百六十四文廿八日ハ十三万四千二百十七貫
 七百廿八文廿九日ハ二十六万八千四百三十五貫
 四百五十六文三十日ハ五十三万六千八百七十貫
 九百十二文おしハ三十日ぶんあ合せて五百〇七万三
 千八百四十三貫八百廿三文ありあおし浅馬あしうまも負おと
 れハ四十貫一駄いとして十二万六千八百四十五疋
 不當あると申上げおしハ秀吉公ひでよしきてくをのおしハ世
 事ことハいこさめのかお秀吉をああらせたりゆり

とて約束いおしハ遣おといらしましの軍用いましやりるぞよ
 と仰いられしとおり

重修真書太閣記十編卷之十七終

大閣記十編卷之十七

重修真書太問記十編卷之十八

大和太納言近江中納言阿州渡海の事

并後藤又兵衛智謀の事

阿州の注進今ゆくと待あふ餘り内大臣秀吉公御
 機嫌あしき處曾呂利新左衛門り輕口と申上げ
 るより忽御笑あそころうの御褒美の毎日倍增錢
 あらうよ仰山ひるる驚さあひ倍增錢の代り御秘
 藏の茶入と賜ころうり新左衛門あ戴さ
 倍すころうり濟した金の聲茶入茶々れ曾呂利たまされ
 と申上げるより秀吉公御機嫌直り若侍衆と召

大問記十編卷十八

一

出され責馬仰付らるる日頃御秘藏の大黒と
いふ逸物と大谷慶松うけあはせりてられと乗ける
う序より破あはれ又急と責付け進退周旋ま
こと規より従ひ矩に應と秀吉公より御覽ありける
り馬も馬なり乗人も乗人そと深く御感ありて御
褒美賜くる其次の郊花月もとて五尺八寸古今無
双の悪馬なり世よ名と得る馬乗一人とて乗
負とるめのなり福嶋市松あれと見ていつて一責責
て御覽よ入んと馬場よ下立手綱と取て引廻し見
る日頃ハ荒れ荒れ荒る荒馬なれと市松り氣色よ
や恐といけん實に穩やうよ見えつるよりの立髪取

てゆくりと打騎二三返馬場と渡しその後閑に双
循飛翻花獅子蹴狂濤なりといふ足並と騎つるよ
よも名馬やと見物の目と驚うけよの秀吉公御
氣色よりこの次の黒の駒くと仰せよといひ
と御料理人心得違へ握飯よ黒胡麻うけて奉り
うの秀吉公御覽せよと馬鹿のめ何と聞いと
御機嫌ありりりけよの曾呂利新左衛門
握飯黒胡麻うけて出つよの皆人よとあうまといふと申上
げらるる秀吉公御氣色あをり新左衛門嘯をい
但尻といふといはぬと申と過料しやとよと御
意ありけよの新左衛門畏り成ると尻と申と申上

本朝記一編卷十八

まことすいもー又御前よも尻と御意遊ろしたる新
左衛門へ御褒美被下はへと申上る秀吉公尤あり
との御意ありさて新左衛門申上はハ十七八の娘
ろ花見よ出せして花の下みて腰を振て躍りま
見物人ろさても見事やと申てろり急急この奴
も林几腰をうけと段々御ろあー申上實は咽り乾
ろまろた御茶一服と申よろ茶道衆茶を吞とれ
新左衛門是ハ水あーく私工夫の釜よて煮まを
ハ加様のあー水も能ろりまハと申上は秀吉
公それろり様の釜と御尋よ付新左衛門とれハ
櫛の木よて作りまろた釜と申上る其時秀吉公を

見てハ釜の後ろ焦ろてあろろと被仰新左衛門平
服よてろ御褒美と申上る秀吉公打笑ろをあハ
さろー已よ謀らまろろ但褒美由錢の倍増ハ
ぬと仰出さる因て新左衛門米を紙袋よ一杯被下
ハ様と申上は秀吉公何よも遣ろハと被仰
出たり夫ろり新左衛門厚紙よて五間よ三間半の
紙袋よつきたて兵糧倉へ引ろろを此末拜領のよ
と申ハ秀吉公何ろ米ハ遣ろ一人よて持
行と仰られし時
此度も藏取ろを給ろろ元手の糊と紙のそろ
秀吉公笑ろをあハ管家も旅ろけゆへ何もあ

いふいと被仰しうん

あつ口風を引きて骨折て旅の御客は曾呂利なまされと
申上しうん秀吉公大に御悦ひあり折ふし右臺の
松うれしとて人々忌むしうんと見て

御秘藏のときこの松うれしけり己うもそいと君もあつと

申しうんまじく御感ありて物多く賜をうける時
北畠内大臣信雄公曾呂利とのまゝとふしと左様
は口軽しとて被仰しうん是は歌袋と申のの
持て居故と申は信雄公その歌袋うれしゆつう得
させしと仰られしうん百兩被下たう止可申と申
しうん信雄公ひるゐると百兩やまへしと被仰ける

よもろ然の明日さし上可申とて退出し翌日白木
の箱一つ持参しと差上る開て御覧とれは短冊お
り

春とよ咲しこれる梅のまみ木とて見よむとあつと

書たりとて加様のとよと御徒然と忘とあひけ
るうちよ秀長秀次兩卿湏本と發し阿州へ入し
進あり抑阿波國板東郡泊し一城と築きて根城に
それしうん所々へ手遣あり撫養の木津城し三好
り侍大将ひるける東条紀伊守り弟關兵衛五千余
騎しと楯籠り一宮城し江村孫左衛門谷忠兵衛
一万余騎岩倉の城し福原隼人熊谷源八とた

五千餘騎長曾我部元親へ三方の請手便より
とて阿州三好の郡大西白地陣と取りて土佐國
の西伊豫國の宇和喜多二郡へ山嶮々々して他國
の人常道と艱ゆり因て爰へ吉良元京進を置
東阿波國美馬麻殖海部三郡より嶮岨なれは年岐
長曾我部親泰と置海部穴喰甲の浦野根より一
日路の間へ大切の処より敵めり寄るとあり土
州長岡の長曾我部孫三郎盛親小野宗永南喜山庄
右衛門以下一万余騎甲の浦へ出て出親泰より力と
合をへとあり叔父大西の土州より七里の山
越より四國の正中よりこころあり豫州阿江へ五里

財田へ六里讚州西尾へ九里阿州脇の城へ十一里
讚州植田の城へ脇より三里の山道より脇の城
より長曾我部利兵衛尉と置て大西の羽翼とて西
讚岐の香川五郎次郎親政の元親の次男より西長
尾の城へ國吉甚左衛門尉二千余人よりありと成
り元親の白地よりありて讚州合戦并上方の容子
と聞て今度秀長秀次六万余より押渡り木津宮岩
倉へ寄ると風聞と元親熟あひり木津岩倉一宮
の廣地より戦ふと便あり如何もも敵
と南方より引付勝負と決をへと軍議と定め長男
信親と豫州より阿州へ呼取浮武者となり敵の及

九段一編卷八
三
方へ向ふと議たり然るに秀長秀次兩
卿へ阿州へ馳付東条九郎兵衛と打破りしより直
に撫養よりけ向ふて是より何へ向ふと評定
の処へ讃岐へ渡り味方の勢二万三千餘騎とて
阿波讃岐の塊なる大坂越して到着ししより
大和近江の兩納言大悦とをぬひ直に對面あり
て互に軍の談義及び都合八万五千餘騎を二手
に分秀長卿へ一宮の城と向ひ秀次卿へ岩倉の
城と向ふ抑ふの岩倉の城といふに阿州三好美馬
二郡の東より阿波郡より秀次卿の養父山城
入道笑岩齋の舊領といふと以て秀次はれより向ふ

とてなりその上より黒田孝高來會て秀次と補佐
て當國と切平けんと實に專一の良策なれとも私
より如何あると泉州塊へ伺はれけるに秀
吉公我弟たる孝高の約を播州責の時兄は讃岐の軍
と志し見合を阿州へ向ふと實可然に軍の事へ
孝高次芽たるより仰下されたり岩倉の大將
長曾我部掃部頭智勇兼備の侍より兵士より剛
勇いれに防くも手堅く成も丈夫いれに藤堂與右
衛門の大手より向ひ仙石權兵衛へ搦手より向ひ八方
より稻麻竹葦の如く取りと息をもくれを攻た
りしに城中より大木大石を投りけり射し

鉄炮と打ちけるるる寄手もさびるる攻め
んて見えける処と見をす掃部頭城門を開きて
切て出るその出たらし紐糸の鎧の裾二段紫下濃
よおとたるを草摺長と著て半月打する五牧甲
と猪首と著す晨朝とつゝ九寸さうりの大馬と
打のり一丈二尺の大身の鎗と中段よりさへ藤堂
の手へ突りける當ると幸と突立しうの藤堂勢散
散と突萌され立足もびく亂と立たり仙石の手へ
ハ城中より栗山大之丞とのみめ切りける
り是も掃部頭ととぬ勇士よく面も振と敲と
立けるよるう仙石も念ひく切りけたり黒田の手

よて後藤又兵衛母里太兵衛菅六之助三人一手よ
りて掃部頭よりけ向ふ後藤ハ刃鎗の上手なり
掃部頭のりなることさあ有たりらん又兵衛の鎗
と請をん馬より真逆と落たる処へ掃部頭の馬
廻り岡田尤近深川喜右衛門宮本四五六兵衛三人
うけふさうりて後藤と戦ふると掃部頭その場
と引くり乗替のりて又うけ向ひ寄手と突破
り栗山と共に城中へ引入たり但しあハ城方勝
軍とす後より後藤と切崩されしころも無念
ひのりて長曾我部掃部頭にもハ一夜討て寄手
の鋭氣と取りしうんと取々支度たりけり

大岡記十編卷十八

長曾我部掃部頭夜討の事

并秀次勢大麻山を攻る事

長曾我部掃部頭へ上方勢と合戦して初度の切勝
とつくととも後藤又兵衛り習ひ覚えし刃鎗は刃ら
ととらぬのくは落馬しその間も能者多く討をつら
とつくととも残念なり但寄手の陣中終の軍小勝た
しと定めて今宵の油断しつらんして一夜討して
書の軍の無念と晴さんと手勢と勇め兵糧つらと
さ馬は秣飼丑の上刻と今やくと待居り寄手の
方より掃部頭りつらりり如く初の軍は城中の兵
士は切崩されて散々敗走しつととも後の軍は

勝たれへ鬼神とつとれし掃部頭も少し懲り
つらん又能者多く打捕たしは城中も定めて弱り
たらんと推量し鎧を脱して馬の鞍とれり腹帯
とゆるめて打あたり後藤又兵衛此体と見て孝
高より向ひ申ひけるは掃部頭り今日の振舞事とよと
る間も何さま四國第一の勇将と申つとよ又兵
衛はこれすて数多の軍は合ひひつととも今日初と
とひし息たらしくひひしと尤の覺え申さば
は味方終の軍よりちつとよと以て何とひし陣中さ
はめさし大く本陣よりして總て鞍とれり腹
帯ゆるめては定めて帯紐解て寝たる所もいへ

掃部頭定めて今宵夜討は寄んとくくるはうん其
 用意をせよと申と聞て孝高も實々能心付たり本
 陣へその事申へしとて黒田秀次の陣へ行向ふて
 諸物頭は此事を談し夜討入たるはうしくと其手
 當となりてを待居たり掃部頭へ是と知移の丑の
 刻よりつとを待て三百余人寄手の陣へ切てり
 める寄手おのひもぬありて散々敗走を
 ると掃部頭さも有へしと猶本陣へ打入んとくる
 時鉄炮一つもあつたや否潮のこく如く大軍一度起
 り立松明の光白晝の如く掃部頭おれを見てのや
 のや敵謀あうくしての詮なり引退やとつと聲と

の備と立直しとつと引へ黒田仙石藤堂の人々
 遁さしと八方よりあれを取巻掃部頭めめしと
 と切り突立戦へ寄手も多し討とつとこと
 掃部頭の勢も大形討死し残るはもつと三四十
 騎是勢もつと叶しと一方打破り大麻山と間尾
 六左衛門尉とつとめめめ籠り城を志しと引退
 さけり寄手案内と知されは辛くして掃部頭大
 麻山と馳入助六左衛門尉と對面し夜討仕損しつ
 るとと語り再度軍と起し今宵の辱ととくうを
 と血眼なかりと物語りける処へ岩倉とあめり
 雑兵追々馳來り注進しけるは黒田り手の後藤又

兵衛管六之助母里太兵衛と之間に寄來り攻め
るに、城の中にも栗山大之丞と防戦し、い
つに寄手も攻め、て見え、目も余る大軍
は、れは入替、責付い、と大之丞戦死し、岩倉
落城、及ひいと申、掃部頭躍り上り、口惜
や残念や、某年來持、へ城なるの、敵と取
ど、このう、て、敵陣へ走入、屍と九原、
曝し名と末代、止む、と怒り、ける、と助六左衛
門尉大、制し、九様、申され、い、事、一、へ聞え
ひ、へとも和殿、今戦死し、あ、とて取、と岩倉の返
る、へき、よも非、び、却て敵、と力、と付、い、事、然、る、へ、

此城、分内、狭、い、と要害、あ、る、兵、糧、も、一、年
を、う、り、へ貯、へ、い、是、より、後、敵、と、爰、に、引、付、方、便、と
用、ひ、討、取、い、く、開、運、の、期、も、有、へ、い、と、申、勸、む、
よ、り、掃、部、頭、も、此、意、に、任、を、大、麻、山、に、指、籠、り、助、六
左、衛、門、尉、と、共、に、防、禦、の、手、當、と、な、り、け、り、又
中、納、言、秀、次、卿、へ、後、藤、う、軍、機、と、以、て、岩、倉、の、城、と、
と、此、勢、と、授、さ、び、大、麻、山、と、攻、落、と、へ、と、て、翌、日
郊、の、一、點、あり、押、寄、あ、り、大、麻、山、と、の、あ、り、讚、岐、國、
大、内、郡、に、續、さ、る、大、山、よ、り、要害、堅、固、の、山、城、に
て、城、將、間、尾、助、六、左、衛、門、尉、の、四、國、に、聞、え、し、智、謀、の
勇、士、より、其、上、長、曾、我、部、掃、部、頭、と、加、り、て、防、戦、

大内郡に續さる大

64
 930
 2880
 64
 1280
 464
 180
 2480

の用意をたたる処なり敵と坂七分引寄柵一重
 ありて待りける処へ勝りたりたる上方勢火の野
 山と燃えたり如く燄々とお寄るとそのまゝ下立
 て柵と引破り逆茂木を取除我先りと切うとこの
 城中より下て防さしめの一支も支えは逃のりる
 黒田仙石藤堂浮田以下曳々聲を出しさしめ嶮
 坂道と無二無三進むと見て城中より
 麥の藁と竹の皮と包一尺をくりり切て投出
 げり地は落るとそのまゝ把ねさけて坂道よこ
 ちちたり上方勢坂を上りけるこの此麥藁ふと
 つりて足めと狂ひ人も馬も上りりける処へ大

石大木あげかけ々ゆまより寄手多くそんたり
 後藤又兵衛是を見て黒鉄のめのみ坂道を掘切を
 足つて成作藁火をほけ焼きて押上り
 ける処を見まし城中より水多くかかかけ
 かい火のたちまちみ消そのうへみ水竹の皮を濕
 しけるみより坂道ぬかりていよくのぶりか子
 せり後藤又兵衛又工夫して檜の木三尺をかり
 ありと十文字に切合せその上み八寸前を以て契
 入切食せ手木を以て押上坂一面はあせ成あらへ
 ける不とり坂道平らかあり五六間のみ壇
 を築立たり城中よりこれを見てちめ木石を

大目録一巻六十一
 二

あけて支えけるか後よこれ城支ふ所ともせさ
ま々あよより寄手おめいふやうに法くりき備した
り寄手かくてハ足たまりよと喜ひけるかその
夜城中より切て出寄手を追くらし柵を結たりし
ハ折前出らへたりし櫃の木の壇も城中より
切ていける不便よくありしと實は口惜き次第か
是とて後藤又兵衛も牙を啖て口惜かる仙石權兵
衛急度思案しけるわこの山城は水の澤山あると
不思議あり定めて奥山より谷川成堰入ららん
あせを尋ね出して水を止めかハ攻る便よかるへ
しと心きくたる足輕と由を五人をかりしのをせ

そのうち明日一日仙石一手入て攻申へしと請申
ける茂秀次卿大よよろこひ玉ひ神速よ許し玉ひ
んはとさして後藤又兵衛心をおめいひ出せしこと
ありとて鉄炮三百挺足輕六百余人を引率し是も
同しく山道ふかく入まなり

重修真書太閤記十編卷之十八終

